



Title	西フリジア語の文法構造 : 動詞 (2)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(3), 53-72
Issue Date	1998-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33726">http://hdl.handle.net/2115/33726</a>
Type	bulletin (article)
File Information	47(3)_PL53-72.pdf



[Instructions for use](#)

## 西フリジア語の文法構造——動詞 (2)——

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

— tiidwurd (2) —

(*The Annual Report on Cultural Science* 47-3 (No.96). The Faculty of Letters, Hokkaido University, Sapporo, Japan 1998. ISSN 0437-6668)

SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

### § 74 時制と法

時制は「現在」と「過去」の2種類を語形変化で区別する。時制としての「未来」は確立していない。時間としての未来の表現については話法の助動詞の章で述べる。法には直説法と命令法（命令形）がある。接続法はほぼ消失した。

#### (1) 現在形

現在形は発話時に起こっている出来事に限らず、話者の主観的な現実世界にかかわることがらを広く表現する無標の形式であり、用法が多岐にわたる。

##### (a) 規則・法則・真理

De moanne *draait* om 'e ierde. 「月は地球のまわりを回っている」  
(Zantema 1984 : 702)

In heal dozyn *is* seis. 「半ダースは6個である」(Bangma 1993<sup>2</sup> : 16)

Trettjin *is* it ûngeloksgetal. 「13は縁起の悪い数字である」(Bangma

1993<sup>2</sup> : 16)

(b) 現行の習慣・傾向

Taal *brâk*st alle dagen. 「言葉は毎日使う」(ULI'S, B 20 : 16)

Mem *kôket* jûns waarm iten. 「母は晩に暖かい食事をつくる」(ULI'S, B 13 : 12)

Bern *waakse* tsjintwurdich hurd nei folwoeksenheid. 「子供はこのごろでは大人になるのがはやい」(ULI'S, B 10 : 19)

(c) 現在進行中の出来事

'oan it + 第 2 不定詞 + wêze' については § 75 (5) で述べる。

Hja *sitte* yn 'e wenkeamer. 「彼らは居間にすわっている」(ULI'S, A 11 : 2)

Hjoed *skynt* de sinne. 「今日は日が照っている」(ULI'S, A 1 : 10)

(d) 過去からの継続

Do *sitst* al twa oeren efter it stjoer. Sille wy net earne in kopke kofje drinke? 「あなたはもう 2 時間もハンドルを握ったままでしょう。

どこかでコーヒーでも飲みませんか」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 98)

Dy huzen *stean* hjir al trije jier. 「その家々はここに建てられてからもう 3 年になる」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 98)

Beppe *is* al tolve jier widdo. 「祖母はもう 12 年も未亡人だ」(ULI'S, B 1 : 9)

⇒ ドイツ語やオランダ語も同様。英語では現在完了形（または現在完了進行形）を用いることに注意。

(e) 未来の出来事

意志・要求・推量などの話法的な意味を明示する場合には 'sil (話法の助動詞 *sille* の現在形) … 第 1 不定詞' などを用いるが、ふつうは現在形でかまわない。

Wy *kieze* moarn in nije gemeenterie. 「私たちは明日、新しい町議会議員の選挙をする」(ULI'S, B 11 : 25)

Us beppe Jantsje *wurdt* moarn tachtich. 「祖母のヨンチェは明日、80

歳になる」(ULI'S, B 11 : 6)

Moarn *prate* wy fierder. 「明日、続きを話そう」(ULI'S, A 11 : 2)

As er *komt*, moastst my roppe. 「彼が来たら、君は私を呼ぶんですよ」  
(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 58)

☞ ドイツ語やオランダ語も同様。

#### (f) 歴史的現在

一連のことがらを伝える場合、過去の事実を客観的に列挙するとき用いる。

Tsjin de folksskriuwerij fan it lêst fan de 19de ieu en it begjin fan de tweintichste *komt* in espeltsje jonge skriuwsters en skriuwers sa om 1915 hinne yn 't ferset. 「19世紀後半と20世紀初頭の民衆文学に対抗して、1915年頃から若い作家たちのグループが台頭する」(Stienstra 1982 : 120)

一般に歴史的現在はまとまった文章(テキスト)で現われることが多い。出来事にたいするコメントやテキストのまとめの部分では、過去形や現在完了形との交替がよく見られる。用例は§ 75(3)(f)で示す。

## (2) 過去形

過去形は現在完了形とならんで過去の出来事に用いるが、おもに物語・回想・歴史的叙述など、日常生活にかかわる現実世界から離れた一連の出来事を表わすことが多い。婉曲・丁寧・遠慮、非現実といった話法的な表現にも用いる。現在完了形との相違は§ 75(3)で述べる。

### (a) 物語・回想・歴史的叙述

Der *wiene* ris twa manlju op in doarp, dy't beide deselde nammen hiene. 「昔、ある村に同じ名前の2人の男がいた」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 15)

Dat (=Dokkum) is ien fan 'e âldste stêden fan Fryslân. Yn 'e tiid fan 'e Evangeeljeprekers *waard* de namme al neamd. Yn 'e omkriten *waard* doe Bonifatius fermoade. Eartiids *wie* dy stêd in seestêd. 「そ

れ (=ドクム) はフリースラントでもっとも古い町である。福音伝道の時代にすでにその名前が挙げられている。その周辺で当時、ポニファティウスが暗殺された。昔、この町は海に面した町だった」(ULI'S, B 17: 22)

(b) 婉曲・丁寧・遠慮

“Hawwe jo dizze trui ek yn in oare kleur?” “Hokker kleur *hiene* jo yn 'e holle?” 「このセーターは別の色はありますか」「どの色をお考えでいらっしゃいますか」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 40)

“Jo *wiene* der út, begryp ik?” “Ja, wy nimme beide in Dockumer kofje.” 「(ご注文は) お決まりですか」「ええ、二人ともドクム・コーヒーにします」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 10)

話法の助動詞を伴うこともある。

Goeie moarn, mefrou, menear. *Woene* jo al bestelle? 「おはようございます。ご注文はもうお決まりですか」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 7)

*Ik mocht* doch noch in koekje hawwe? 「私はもうひとつケーキをもらってもよかったのよね」(Dykstra 1996: 73)

(c) 非現実

話法の助動詞を伴う表現については話法の助動詞の章で述べる。

*Al hiest* wjukken, dan *wiest* noch te swier. 「翼があったとしても、君はまだ重すぎるね」(ULI'S, C 3: 8)

*Ik woe* dat ik in fûgel *wie*. 「私が鳥だったらいいのに」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 54)

*Kaam* er mar! 「彼が来ればいいのになあ」(Eisma 1989: 8)

- ☞ このように、過去形はたんに過去の出来事を表わすのではなく、何らかの話法的な意味を伴っている。物語・回想・歴史的叙述は現実世界から離れた話者の想像世界を描くものであり、たんなる過去ではない。§ 75 (3)で述べるように、日常生活にかかわる現実世界の過去の出来事には時制としては「現在」の現在完了形を用いることが多いのだから、過去形は時制の範疇というより、むしろ話法の範疇とみなすほうが適当であるとも言える。両者の使い分けは絶対的ではないので、明確な結論は出したいが、極論

すれば、西フリジア語では時制の対立が希薄であり、時制という文法範疇を設定する根拠が弱いことになる。同様の事実はオランダ語やドイツ語にも当てはまる。

### (3) 命令法 (命令形)

#### (a) 語形

命令法 (以下、「命令形」と言う) は数の区別なく 1 種類であり、動詞のクラスによって語形が異なる。

#### ① e-動詞：不定詞語幹と同じ

*Yt lekker!* 「いただきます (= おいしく召し上がれ) (yt ← ite「食べる」)

#### ② je-動詞：「je-語幹」と同じ

*Wachtsje net langer!* 「これ以上、待つな」(wachtsje ← wachtsje「待つ」)  
(ULI'S, B 10 : 7)

#### ③ n-動詞：現在形 1 人称単数と同じ

*Doch it no!* 「今、それをやれ」(doch ← dwaan「する」)(ULI'S, B 10 : 7)

#### (b) 話法の副詞 (§ 53) の付加

命令文にさまざまな話法的なニュアンスを加えるために用いる。

*O God, lit my doch net langer libje!* 「ああ、神様、私をこれ以上生き長らえることのないようにしてください」(Dykstra 1996 : 75)

*Gâns diersoarten binne hast of hielendal útstoarn, tink mar oan de walfisk.* 「動物の多くの種類がほとんどまたはまったく滅びてしまった。たとえば鯨のことを考えてみなさい」(ULI'S, C 7 : 8)

*Kom der doch eefkes yn!* 「まあちょっとお入りなさいよ」(Dykstra 1996 : 76)

#### (c) 主語人称代名詞独立形の付加

子供をなだめたり、大人をからかったりする場合に用いることが多い (§ 38 (2)(b)④, (3)(b)④)。

#### ① 2 人称代名詞

*No, hâld do dy mar stil.* 「いいかげんにちょっとお黙り」(ULI'S, C 3 : 7)

*Skink do ús ris yn.* 「注いでちょうだいよ」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 127)

② 3人称代名詞

*Kom sy mar by mem.* 「お母さんのところに行きなさいね」(女の子に向かつて) (Boersma/Van der Woude 1980<sup>2</sup>: 68)

*Sis hy it mar.* 「言ってごらんなさいよ」(男の子供や大人に向かつて) (Boersma/Van der Woude 1980<sup>2</sup>: 68)

(d) 命令形以外の命令の表現

命令形のほかにも命令の意味は表現できる。

① 2人称主語の現在形

“Wiene jo der al út?” “Nee, noch eefkes. Kin ’t noch wol eefkes?”  
“Fansels, *jo jouwe* mar in wink.” 「(ご注文は) もうお決まりですか」  
「いえ, もうちょっと。もうしばらくいいですか」 「もちろんですとも。  
合図をなさってくださいね」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 9)

② 第1不定詞

*Trochrinne!* 「歩きとおしなさい」(Eisma 1989: 11)

*Ophâlde!* 「やめなさい」(Eisma 1989: 11)

2人称の主語代名詞を伴うこともある。

“Hoe hast sin oan dat fleisguod moarns betiid. Soks soe my fierste dreech wêze. Wat swiets giet dan noch wol.” “Do hoechst dyn sean aai ek net tink?” “Ho, ho, *ôfbliuwe do*. Dêr moat ik my noch op beriede oft ik dy nim of net.” 「朝っぱらからよくそんな肉を欲しがるもんだね。ぼくにはくどくてたまらないよ。何か甘いものならいいけど」 「あなたはゆで卵もいらないわけね」 「えー, ちょっと待ってよ。それはよく考えてからにしないと」(Bangma 1993<sup>2</sup>: 128)

## § 75 完了形と進行形

(1) まとめ

完了形は‘過去分詞+完了の助動詞 *hawwe/wêze*’ (完了形第1不定詞) であり, *hawwe/wêze* が現在時制と結びつけば現在完了形 (*de folsleine*

notiid), 過去時制と結びつけば過去完了形 (de folsleine doetiid) になる。この場合, 主文では過去分詞は文末 (右枠) に置かれ, 完了の助動詞定形とともに枠構造をつくる。ここでは能動態の完了形について述べ, 受動態の完了形は受動態の章に譲る。話法の助動詞の完了形は話法の助動詞の章で説明する。

完了形第1不定詞: 過去分詞+完了の助動詞 hawwe/wêze

songen hawwe (← sjonge「歌う」) kommen wêze (← komme「来る」)

現在完了形: 完了の助動詞現在形…過去分詞

ik ha(w)	…songen	ik bin	…kommen
(do) hast	…songen	(do) bist	…kommen
jo ha(wwe)	…songen	jo binne	…kommen
hy hat	…songen	hy is	…kommen
hja ha(wwe)	…songen	hja binne	…kommen

過去完了形: 完了の助動詞過去形…過去分詞

ik hie	…songen	ik wie	…kommen
(do) hiest	…songen	(do) wiest	…kommen
hy hie	…songen	hy wie	…kommen
hja hiene(n)	…songen	hja wiene(n)	…kommen

完了形は不定形の範疇であり, 発話時とは無関係に出来事の時間的前後関係を示し, ある時点において出来事がすでに終わっていることを表現する。時制としては現在完了形は現在時制, 過去完了形は過去時制であり, 「現在完了時制」, 「過去完了時制」という時制があるわけではない(「複合時制」というのは便宜的な名称にすぎない)。現在完了形は過去形とならんで過去の出来事を表わし, 両者の使い分けには注意が必要である。現在時制は未来の出来事も表わすので, 現在完了形も未来の出来事を表わすことがある ((2)(3)(4))。進行形は補助的な構文はあるものの, 十分には発達していない ((5))。



(2) 完了の助動詞 *hawwe/wêze*

(a) *hawwe* と *wêze* の選択

完了の助動詞 *hawwe* と *wêze* の選択は次のようになる。

‘過去分詞+*hawwe*’: 他動詞および *wêze* に支配されるもの以外の自動詞

‘過去分詞+*wêze*’: 場所の移動や状態の変化を表わす自動詞

同じ動詞でもこの区別に従って使い分ける。

i) ‘他動詞の過去分詞+*hawwe*’ (*hawwe* 支配)

Yn koarte tiid *hat* dat it oansjen fan ús provinsje gâns *feroare*. 「短い間にそれは私たちの地方の外観をまったく変えた」(*feroarje*「変える(他動詞)」)(ULP'S, B 9:13)

ii) ‘状態の変化を表わす自動詞の過去分詞+*wêze*’ (*wêze* 支配)

De lêste jierren *binne* de doarpen wol gâns *feroare*. 「最近何年かの中に村々はたしかにとても変わった」(*feroarje*「変わる(自動詞)」)(ULP'S, C 11:2)

その他の用例。

① 過去分詞+*hawwe*

*Hat* er wat *ferteld*? —Hy *hat* neat *sein*. 「彼は何か言っていましたか」「何も言っていませんでした」(*fertelle*「伝える」, *sizze*「言う」)(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>:24)

Wy *ha(wwe)* in moai boek *lêzen*. 「私たちはすてきな本を読んだ」(*lêze*「読む」)(ULP'S, B 6:20)

Mem *hat* de amer leech *getten*. 「母はバケツの水を空けた」(*jitte*「注ぐ」)(ULP'S, B 9:17)

Sy *hawwe* lekker *sliapt*. 「彼らはよく眠った」(*sliepe*「眠る」)(ULP'S, A 7:13)

② 過去分詞+*wêze*

Ik *bin* oer in stien *fallen*. 「私は石につまずいてころんだ」(*falle*「ころぶ」)(ULP'S, B 10:17)

By dat treinûngelok *binne* hiel wat minsken *stoarn*. 「その列車事故で

大勢の人々が亡くなった」(stjerre 「死ぬ」) (ULI'S, B 8 : 15)

Trije jier lyn binne wy troude. 「3年前に私たちは結婚した」(trouwe 「結婚する」) (ULI'S, A 20 : 4)

Is er foar it eksamen slagge? 「彼は試験はうまくいったのか」(slagje 「うまくいく」) (Zantema 1984 : 916)

It is him net slagge. 「彼はそれがうまくいかなかった」(Zantema 1984 : 915)

(b) 注意すべき点

① west hawwe (← wêze 「…である, …がある・いる」)

オランダ語 (zijn) やドイツ語 (sein) とは異なり, wêze は hawwe 支配である。

Hat er siik west? 「彼は病気だったのか」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 19)

“Ik haw nei Ljouwert west.” “Wa hat mei west?” “Ik haw der allinnich hinne west. 「私はリャウエト(オ・Leeuwarden レーワルデン)に行ってきた」「だれと行ったの」「一人で行ったのさ」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 12)

② 運動動詞

運動を表わす動詞もどこからどこへという具体的な場所の移動を明示しない場合には hawwe 支配である。driuwe [drjýwe, drjó:we] 「漂う」, farre [fárə] 「(船で/が) 行く」, fleane [flĕnə] 「飛ぶ」, ride [rɪ(:)də] 「(車・電車・馬で/が) 行く」, rinne [rĭnə] 「歩く」, stappe 「歩む」, swimme [swĭmə] 「泳ぐ」などがこれに属する。

i) 過去分詞+hawwe

Yn 1632 hat it earste trekskip fearn tusken Amsterdam en Haarlim. 「1632年に初めてアムステルダムとハーレム(オ・Haarlem)の間に(馬による)引き船が走った」(ULI'S, B 18 : 7)

Sûnt 1880 en oan 1948 ta ha hjir ek trams riden. 「1880年以降, 1948年まではここにも路面電車が走っていた」(ULI'S, C 18 : 8)

ii) 過去分詞 + wêze

De grutte minsken *binne* ek út it wurk *stapt*. 「大人たちも仕事をやめたやってきた」(ULI'S, B 5 : 10 変更)

It oantinken *wie* samar yn him nei boppen *dreamt*. 「思い出が彼の脳裏にすぐによみがえってきた」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 87)

☞ ドイツ語の *fahren* 「(車・電車で/が) 行く」はつねに *sein* 支配であることに注意。

ただし, *komme* 「来る」, *gean* 「行く」はつねに *wêze* 支配である。

*Bist* allinne mei de bus *kommen*? 「君は一人でバスに乗って来たのかい」(ULI'S, B 18 : 11)

Ik *bin* der tsjin 't sin hinne *gien*. 「私は気が乗らないままそこへ行った」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 134)

場所を示す名詞句を伴う場合も同様である。

Tûzenen *binne* de *paden gien*, fan 't libben, jierren en dagen. 「何千もの人々がその道をたどった。人生と歳月と日々の(道を)」(S. Kloosterman: "Tûzenen...")

③ アスペクト動詞

*begjinne* [bægʃɪnə] 「…しはじめる」, *einigje* [áinəɣjə, éi..]/*ein(di)gje* [áindəɣjə, (áin)jə, éi..]/*einje* [áɪnjə, éi..] 「…しおわる」のように状態の変化を示すアスペクト動詞は *wêze* 支配である。

As bern *bin* 'k al *begûn* postsegels te sammeljen. 「私はもう子供のころから切手を集めはじめた」(ULI'S, A 19 : 7)

De konferinsje te London *is eindige*. 「ロンドンの会議は終わった」(WFT 4 1987 : 343 現行の正書法に変更)

☞ 上記のアスペクト動詞は自動詞としても用いる。

Wy *begjinne* mei de earste les. 「最初の課からはじめましょう」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 119)

日本語では「…しはじめる/しだす/しかける」のように他動詞で表現することに注意。ただし、「…しおえる/しおわる」は用法に応じて使い分ける。

- ④ fergetten [fəgētən] {hawwe/wêze} (← ferjitte [fəjʔitə] 「忘れる」)  
意味の相違による hawwe と wêze の使い分けに注意。

i) fergetten hawwe

Ik *ha* it *fergetten*. 「私はそれをするのを忘れていた (=思い出した)」  
(Stienstra et al. 1982 : 60)

Us mem *hat* de boadskippen *fergetten*. 「母は買い物をするのを忘れた  
(=のがす, しそこなう)」 (ULI'S, B 9 : 20)

Pake *hat* syn stôk *fergetten*. 「祖父は杖を忘れた」 (ULI'S, B 9 : 17)

It is my yn 'e wei dat ik jo jierdei *fergetten haw*. 「あなたが誕生日であることを忘れていて申し訳ない」 (Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 90)

ii) fergetten wêze

It is my *fergetten*. 「私はそのことを忘れてしまった (=思い出せない)」  
(Stienstra et al. 1982 : 60)

Wat de sprekker sein *hat is* my no al wer *fergetten*. 「私は話をした人の  
の言ったことをまた忘れてしまった」 (Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 128)

Ik *bin* 't hast al *fergetten*. 「私はそのことをほとんどもう忘れかけていた」  
(Zantema 1984 : 250)

- ⑤ bleaun [bløən] wêze (← bliuwe [bljýwə, bljô:wə] 「とどまる」)

場所の移動や状態の変化を示さないにもかかわらず、例外的に wêze 支配である。

Wêr soe er *bleaun wêze*? 「彼はどこに滞在していたのだろうか」 (Zantema 1984 : 116)

Dat *is* der by *bleaun*. 「それはそのままになってしまった」 (Bangma 1993<sup>2</sup> : 83 変更)

(c) 非現実の表現における例外

非現実の表現では wêze 支配の動詞が例外的に hawwe 支配になることがある。ただし、wêze 支配の例もあり、これを好む傾向も認められる。

Jo *hiene* leaver thús *bleaun*. 「あなたは家にいたほうがよかったのに」  
(Bangma 1993<sup>2</sup> : 136)

As ik net moatten hie, *hie* 'k hjir net *komd*. 「必要がなかったら、私はここには来なかっただろう」(Hoekstra 1997: 56 変更)

As ik har mem wurden wie, *hie* it nea *bard*, wat no *bard* is. 「私が彼女の母になっていれば、今起こったことはけっしておこらなかっただろうに」(現行の正書法に変更; *bard is* との相違に注意) (ib. 56)

助動詞に支配された場合も同様である。

Klaas Taks *moast* mar *meikomd* *ha*; dat *hie* 'k wol *aardich* *fûn*. 「クラス・タクスもいっしょに来るべきだったのに。そうすれば私はとてもよかったのと思うのだが」(現行の正書法に変更) (Hoekstra 1997: 55)

Sa *moast* it *bleaun* *hawwe*. 「それはそうあるべきだったのに」(現行の正書法に変更) (ib. 55)

☞ オランダ語にも同様の現象があり, *hebben*(フ. *hawwe*) 支配は, 可能だったかもしれない出来事が何らかの要因で起こらなかったことを示すのにたいして, *zijn*(フ. *wêze*) 支配は, もともと不可能だった出来事が起こらなかったことを示すという相違があるとされる。

オ. {*Had/Was*} *ik er maar bij geweest*. 「私がその場にいればよかったのに」(Honselaar 1987: 65)

*had...geweest* は都合が悪かったことを暗示し, *was...geweest* は遠い昔の歴史的出来事を述べるなどという相違があるとされる。

オ. {*Had/Was*} *ik er maar bij gebleven*. 「私はその場に残っていればよかったのに」(ib. 65)

*had...gebleven* は残らない決心をした行為を悔やみ, *was...gebleven* は当時, 他のことをしていたことを悔やむなどという相違があるとされる(以上, Honselaar(1987: 65 f)). しかし, 上記の判断には話者によって差がある。西フリジア語でも明確な判断は困難である。

☞ オランダ語では '*zijn* 支配の動詞+話法の助動詞' の完了形でも *hebben* 支配と *zijn* 支配の両方が見られる。

オ. *Dat zoiets {heeft/is} kunnen gebeuren*. 「そんなことが起こりうるなんて」(Honselaar 1987: 65)

*Hij {heeft/is} niet langer dan een uur durven blijven*. 「彼は敢えて1時間以上待とうとはしなかった」(ib. 65)

しかし, 西フリジア語では *hawwe* 支配のみが可能である。

フ. *Dat soks barre kinnen {hat/\*is}* 「同上」

Hy {*hat/\*is*} net langer as in oere *bliuwe doarst*. 「同上」

### (3) 現在完了形

#### (a) 日常生活での過去の出来事

現在完了形はドイツ語やオランダ語と同様に日常生活での過去の出来事についてもっとも一般的に広く用いる。

*Hawwe* jo al fakânsje *hân*? — Ik *haw* trije wike frij *hân*. 「あなたはもう休暇をとりましたか」「3週間休みをもらいました」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 23)

*Hat* it iten dy hjoed wol goed *smakke*? 「今日の食事はおいしかったですか」(ULI'S, B 15: 19)

#### (b) 過去の時間を示す文成分とともに

過去の時間を示す文成分があってもかまわない。

Wy *binne* *justerjûn* *thúskommen*. 「私たちは昨夜、戻りました」(Bosma-Banning 16 変更)

Alde Jabik *hat* *ferline* wike syn frou *ferlern*. 「ヤービクのじいさんは先週、奥さんを亡くした」(B 8: 10)

De polysje *hat* *fannacht* twa ynbrekkers *atrapearre*. 「警察は今夜、二人の強盗を逮捕した」(ULI'S, B 11: 9)

#### (c) 過去における継続

時間の継続を示す文成分とともに用いる場合、現在完了形は過去における継続を示し、英語と違って現在までの継続をかならずしも含意しない。現在まで継続していることを明示するには現在形を用いる (§ 74 (1)(d))。

Wy *hawwe* fiif jier yn Ljouwert *wenne*. It wiene goede jierren. 「私たちは5年間リャウエト(オ・Leeuwarden レーワルデン)に住みました。良い年月でした」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 51)

Ik *haw* al twa oeren efter it stjoer *sitten*. 「私はもう2時間もハンドルを握った」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 98)

Ik *haw* no al mear as in oere op 'e dokter *wachte*. 「私はもう 1 時間以上も医者を待った」(ULP'S, B 6 : 8)

(d) 未来のある時点までに完了している出来事

現在形は未来の出来事をも表わすので (§ 74 (1)(e)), 現在完了形も未来のある時点を基準として, そのときまでに終わっている出来事を表わすことがある。

As er it *dien hat* sil er it sizze. 「それをやってしまったら, 彼はそう言うでしょう」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 59)

Hjirby fersykje wy jo freonlik de stipe foar 1998 binnen fjirtjin dagen nei't jimme dit brief *krigen hawwe* oan ús oer te meitsjen. 「1998 年分の会費をこの手紙を受け取られてから 2 週間以内に当方にお振り込みくださいますようお願い申し上げます」

Wy rekkenje derop dat alle stipe foar ein july 1998 op ús rekken *byskreaun* is. 「1998 年 7 月末までにすべての会費が当方の口座に納入されていることを見越しております」(受動態の現在完了形)

(e) 遠い過去の出来事

遠い過去の出来事であっても, 話者が主観的に日常生活にかかわる出来事とみなせば現在完了形を用いる。

Frjentsjer *hat* yn 1585 in universiteit *krige(n)*. 「フリエンチェル (オ. Franeker フラーネケル) には 1585 年に大学ができた」(ULP'S, B 13 : 12)

Simke Kloosterman is yn 1876 te Twizel berne en *hat dêr* ek har jonge jierren *trochbrocht*. 「シムケ・クローステルマン (西フリジア文学の代表的な女流作家) は 1876 年にトヴィーゼル (オ. Twijzel トヴェイゼル) に生まれ, そこでまた若い時期を過ごした」(Stienstra 1982 : 96 変更)

(f) 現在完了形と過去形の使い分けと混在

§ 74 (2) で述べたように, 過去形は物語・回想・歴史的叙述など, 日常生活とは別の話者の想像世界での一連のまとまった出来事に用いることが多く,

過去の表現としては特殊である (§ 74 (2) の用例参照)。現在完了形は日常生活にかかわる現実世界での過去の出来事に使う点で、一般的な過去の表現と言える。

しかし、両者の相違は話者の主観的な選択に基づくものであり、絶対的な判定は困難な場合がある。とくに受動態・話法の助動詞など形態的に動詞の部分が複雑になるのを嫌って過去形を好む傾向がある。また、*wêze*「…である、…がある・いる」では過去形を好む傾向がある。さらに、以下の点に注意。

① 現在完了形と過去形の文中での混在

過去形と現在完了形がひとつの文で混在する場合がある。

*Wy liezen yn 'e krante dat jo ferhuze binne.* 「私たちはあなたがたが引越したという記事を新聞で読みました」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 119)

*Doe't yn 'e tritiger jierren it busferfier opkaam is de N. T. M. der stadichoan ta oergien de tramtsjinsten troch bustsjinsten te ferfangen.* 「30年代にバスが走るようになると、N. T. M. (北部フリースラント地方鉄道会社)はしだいにバス路線に取って代わられるようになった」(N. T. M.: De Noord Friesche Locaal Spoorwegmaatschappij 1899年設立) (ULPS, C 18:8)

- ② 現在完了形、過去形、現在形(歴史的現在)のテキストでの使い分け  
3者は文体上の効果を高めるために巧みに使い分けられることがある。たとえば、まとまった文章(テキスト)で話者が過去の出来事を述べる場合、現在完了形(現完)で導入し、次に過去形(過)に移行して一連の出来事を叙述し、現在形(歴史的現在、(現))を交えながら展開していく。最後にテキストの締めくくりとして現在完了形に戻ることもある。
- i) 現在完了形—過去形—現在形—現在完了形/過去形

...*Yn 1632 hat* (現完) *it earste trekskip fearn* tusken Amsterdam en Haarlim. *Sa'n trekskip wie* (過) *in lange, smelle skûte mei in lange kajút.* *It waard* (過) *troch in hynder lutsen,* dat op de trekwei



njonken de trekfeart *rân* (過). Dy wize fan reizgjen *wie* (過) in kolossale ferbettering. It trekskip *fear* (過) op tiid en *kaam* (過), net ôfhinklik fan de wyn, op in fêste tiid oan. ...

Op 29 maart 1649 *fart* (現) yn Fryslân it earste treksip tusken Harns en Ljouwert. Al gau *komme* (現) der mear, lykas yn 1647 Dokkum-Ljouwert, 1652 Boalsert-Ljouwert en 1662 Snits-Ljouwert. De trekskippen *hawwe* (現完) it sa'n 200 jier úthâlde *kinnen*, oant it spoar harren taak *oernaam* (過). 「1632年に最初の引き船がアムステルダムとハーレム(オ. Haarlem)の間を走った。その種の引き船は細長い船室を備え、体長が長く、幅の狭い小船だった。それは水路に沿った道を走る馬に引かれた。この旅の方法は大変な進歩だった。引き船は時間どおりに走り、風と関係なく、決められた時間どおりに到着した。...

1649年3月29日にはフリースラントで最初の(馬による)引き船がハーンス(オ. Harlingen ハルリンゲン)とリャウエト(オ. Leeuwarden レーワルデン)の間を走る。まもなく他の路線も登場する、たとえば1647年にドクムーリャウエト間、そして、1662年にスニツ(オ. Sneek スネーク)ーリャウエト間のように。引き船は鉄道がその役目を継承するまで、約200年間長らえることができた」(ULI'S, B 18:7)

ii) 現在完了形—過去形—現在形—過去形—現在形

Ien fan de grutste striders foar 't Frysk *hat* (現完) Harmen Sytstra *west*. Hy *kaam* (過) yn 1817 yn Mullum op 'e wrâld, *waard* (過) letter bakkersfeint yn Arum, Winaam en Seisbierrum, mar hy *hie* (過) och sa'n nocht oan learen. Op 't lêst *giet* (現) er by it bakkersfak wei en *wurdt* (現) skoalmaster. Dat *wie* (過) doedestiids foar in earme jonge mei in klear ferstân sawat de iennichste mooglikheid. Neidat er in pear oare plakken *hân hat* (現完), *komt* (現) er yn Burgum as ûndermaster. Hy *slút* (現) dêr freonskip mei Tsjibbe Gearts van der Meulen. Ut dy tiid *is* (現) ek syn ferneamde 'Wâldsang'. 「フリジア語擁護のもっとも偉大な功労者の一人はハルメン・シス

トラ (1817-1862) だった。彼は 1817 年にムルム (オ. Midlum ミドルム) で生まれ、後にアールム (オ. Arum), ヴィナーム (オ. Wijnaldum ヴェイナルドゥム), サイスビエルム (オ. Sexbierum セクスビーエルム) でパン屋の見習いになったが、勉強がひじょうに好きだった。結局、彼はパン屋の職を捨てて教師になった。それは当時としては利口で貧しい少年にとってほぼ唯一の可能性だった。いくつか他の土地で勤めた後、彼はブルフム (オ. Bergum ベルフム) に教頭として赴任した。そこで彼はチベ・ゲアツ・ファン・デル・メーレンと親交を結んだ。この時代のものとして彼の有名な『森の歌』がある」(Stienstra 1982: 63)

(4) 過去完了形

(a) 過去の時点までに完了した出来事

過去のある時点を基準として、それまでにすでに終わった出来事を表わす。

① 複文の場合

Wy liezen yn de krante dat it iis *brutsen wie*. 「私たちは新聞で氷が割れたという記事を読んだ」(ULI'S, C 9: 15)

Ik frege oft er it nijs al *heard hie*. 「私は彼がそのニュースをもう聞いたかとたずねた」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 102)

Tige wiidweidich hat er ús ferteld wat er dêr *belibbe hie*. 「とても詳細に彼はそこで何を体験したかを私たちに語った」(ULI'S, B 13: 18)

② 単文の場合

It lêste stik fan dat boek *hie* er yn 'e hjerst fan 1976 dien *makke*. 「その本の最後の部分を彼は 1976 年の秋に完成していた」(Ut de Smidte, 31e jiergong nû. 2, maaie 1997: 1)

De boat *wie sonken* en lei ûnder wetter. 「ボートは沈没して水底に沈んでいた」(ULI'S, A 18: 12)

Hy *hie* it yn jierren net *dien*. 「彼はそれを何年もやっていなかった」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 61)

(b) 話法の表現

① 意外さなど

意外さなどの話法の表現に用いることがある。

Ik *hie* krekt *ferwachte* dat ús útstellen oannommen wurde soene. 「私は私たちの提案が受け入れられるものとしてきり期待していたのですが」(Bangma 1993<sup>2</sup>:158)

Wylst er Charlie Parker-ien ferwikselet foar side twa, wurdt der op 'e doar kloppe. Hy docht de doar iepen en sjocht ferheard. “Do Frida, en ik *hie* noch sa *sein!*” 「彼がチャーリー・パーカーのレコードの表面を裏面に変えようとしていると、ドアをノックする音がした。彼はドアを開け、驚いて見た。「フリーグじゃないか、ちょうどそう言おうと思っていたんだ」(ULP'S, A 16:8)

② 過去の非現実—話法の助動詞とともに

話法の助動詞とともに過去の非現実を表わす。詳細は話法の助動詞の章で述べる。

Jo *hiene* better op béd *bliuwe kinnen*. 「君は寝ていたほうがよかったのに」(Bangma 1993<sup>2</sup>:47)

Dat *hie* ik graach *sjen wollen*. 「それは私は見たかったなあ」(ULP'S, B 18:19)

Ik *hie* dat net *freegje moatten*. 「私はそのことをたずねるべきではなかった」(ULP'S, B 18:18)

(5) 進行形

西フリジア語には英語やアイスランド語のような進行形は発達しておらず、現在形や過去形それ自体で進行中の出来事を表わすことができる。ただし、とくに進行中の出来事であることを明示する場合には 'oan it+第2 不定詞+wêze' という構文を用いることがある。

Wy *binne oan it iten*. 「私たちは食事中です」(ULP'S, C 3:8)

“Wêr binne de bern?” “Dy *binne oan it hanwaskjen*.” 「子供たちはどこ

だ」「手を洗っている最中よ」(ULI'S, A 3 : 27)

*Ik bin oan it praten.* 「私は話をしているところだ」(Van der Veen/Oldenhof 1990 : 47)

☞ § 60 (2)(s)参照。

この場合、第2不定詞は動詞を名詞的に用いており、次のように名詞を用いた用例もある。

“Wêr is Auke?” “Dy is yn de tún oan it wurk.” 「アウケはどこなの」  
「庭で仕事をしているよ」(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup> : 16)

#### 参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Honselaar, Wim. 1987. “Zijn vs. Hebben in het samengesteld perfectum”. *De Nieuwe Taalgids* 80. 55-68.

Van der Veen, Janny/Bouke Oldenhof. 1990. *Bekjegau. —Materiaal foar kursussen Frysk foar net-Frysktaligen—*. Ljouwert. AFUK.

\*本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1. 第 85 号, 1995. 37-81)

「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2. 第 86 号, 1995. 43-111)

「西フリジア語の文法構造—冠詞, 名詞, 形容詞—」(北海道大学文学部紀要 45-1. 第 88 号. 1996. 21-81)

「西フリジア語の文法構造—代名詞—」(北海道大学文学部紀要 45-2. 第 89 号, 1996. 79-176)

「西フリジア語の文法構造—数詞, 副詞, der—」(北海道大学文学部紀要 45-3. 第 90 号. 1997. 171-246)

「西フリジア語の文法構造—前置詞と後置詞 (1)—」(北海道大学文学部紀要 46-1. 第 91 号. 1997. 23-62)

「西フリジア語の文法構造—前置詞と後置詞 (2)—」(北海道大学文学部紀要 46-2. 第 92 号. 1998. 41-64)

「西フリジア語の文法構造—接続詞—」(北海道大学文学部紀要 46-3. 第 93 号, 1998. 65-121)

「西フリジア語の文法構造—動詞 (1)—」(北海道大学文学部紀要 47-2. 第 95 号. 1998. 21-97)

北大文学部紀要

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3, 第 87 号, 1996, 41-107)

- \* 本稿は平成 10 年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。  
研究課題：「ドイツ語・オランダ語・フリジア語の対照文法記述—西ゲルマン語  
類型論に向けて」。基盤研究(C)(2), 課題番号 10610491 (研究代表者 北海道大学  
文学部助教授 清水 誠)